

能登半島にトキを呼び戻す
中村浩二（金沢大学 教授）



地域連携型里山プロジェクト

私たち金沢大学の里山プロジェクトは、1999年に角間キャンパスで始まりました。珠洲での活動の基盤には、「角間の里山自然学校」があり、これから角間の皆さんと珠洲の皆さんとのいろいろな形での交流を期待しているところです。

能登半島と東京都は同じ面積ですが、能登の人口は23万人しかおらず、それも2030年には10万になると予測されており、過疎は大問題となっています。その中で能登半島の農業や林業の維持は極めて重要です。私たちはマイスター講座や里山自然学校が果たす役割の1つとして、「トキを呼び戻す」ことを考えています。それは愛鳥家としてトキだけを大事にするのではなく、トキを1つのシンボルとして、トキが生息できるような能登を環境配慮型の農業や林業を通じてつくることであるご理解ください。



「能登里山マイスター」養成プログラム

昨年10月に「能登半島里山里海自然学校」をオープンし、今年の10月からは科学振興調整費で「能登里山マイスター」養成プログラムがスタートしました。このプログラムでは、能登で仕事をしてみたい方、自治体、地域の農協や産業の若手職員、地元の農業後継者・担い手を受講者として受け入れます。地域のリーダーを養成することをめざしており、狭い意味の「農業名人」づくりではありません。

さいわい、奥能登の4自治体と石川県に強力なサポート体制をつくってきました。また、地元の企業・法人からも強いサポートを受けており、若手社員の方々を何人も出しています。



トキが舞う能登のブランド化戦略

能登には本州で最後の1羽のトキが1971年までいました。来年、佐渡でトキが野生放鳥されようとしています。トキが本州に放鳥される時は、ぜひ能登でと思っています。能登で放鳥するためには、環境配慮型の農業をして、よい環境を再生し、トキをはじめとするいろいろな里山の生き物たちがすめる環境をつくる必要があります。

そのような人材を養成するのがマスター講座の役割であり、まずは奥能登の里山里海の現状調査をして、トキが帰ってこられる環境かどうかを調べます。そして、環境配慮型の農業や林業をして、よい環境をつくり、そこでできた作物をブランド化して販売すれば、奥能登がイメージアップされ、よい環境が新たな観光資源となり、石川県の魅力をアピールできるという筋立てです。いま農業は厳しい逆風下にあります。その中でできることを検討したいと思います。2年前にコウノトリを放鳥した兵庫県豊岡市では、「コウノトリ米」などがつくられ、豊岡へ来る観光客の数が増えたという例もあります。

能登半島は過疎・高齢化が進んでいますが、環境はいまでもとても良好です。しかし、現状では、たとえコウノトリが来たとしても長期間滞在するような環境が整っていません。トキを呼び戻すためには2つのことが必要です。1つは自然生態系づくりです。もう1つは、コウノトリやトキに来て欲しい、それが自分たちの生活にとっても意味があるという人・社会の合意形成です。いくらコウノトリが来ても「田んぼの苗を踏んで困る」、「トキが来ると邪魔になる」ということでは、うまくいきません。この2つが同時に達成されることが大事であり、マスター講座の授業の一環としてもこれに取り組むつもりです。



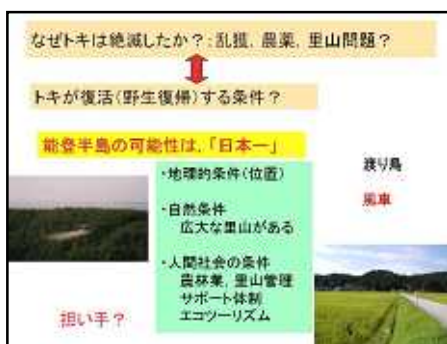
里山里海の健康診断調査

私たちは珠洲市の三崎地区(小泊)と若山地区、輪島市の金蔵地区と名舟地区、羽咋市の神子原地区で「里山里海の健康診断調査」を行なっています。珠洲の雁ノ池と味噌池の間にある広大な休耕田では、予備的な段階ですが、田んぼに水を張り、少しでもこの場所にトキが来やすい条件づくりを始めました。

また、本当にトキを呼び戻す準備として2つのことを行ないました。1つは、来年トキの放鳥予定の佐渡島へ見学に行き、単に自然条件だけではなく、地域の人たちの取り組みを含めて視察し、休耕田の利用法をなどいろいろな情報をいただきました。もう1つは、トキやコウノトリの生態や放鳥に詳しい専門家に現場に来てもらい、奥能登の環境、農業の状況を評価とアドバイスをいただきました。今でも奥

能登では広い面積に松の大木がたくさん生えており、トキが営巣できるというお墨付きをもらいましたが、もちろんこのままでよいわけではありません。さらにこれをどう改善すればよいか具体的な話を聞きました。

奥能登の流水や溜池には、ホクリクサンショウウオ、シャープゲンゴロウモドキなど絶滅危惧種を含むいろいろな生物がいます。同時に外来種のアメリカザリガニ、ブラックバス、ウシガエルもいます。外来種は色々な問題を引き起こしますが、トキの餌動物としていいかもしれませんので、総合的に判定するために調査や聞き取りが必要です。すでに休耕田を利用したビオトープをつくってあるので、そこにいる生き物の種類と量を実際に調査しながら考えたいと思います。



なぜトキは絶滅したか？

トキは急速に数を減らして、穴水町乙ヶ崎を最後としていなくなりました。なぜトキは能登で絶滅したのでしょうか。農薬の疑いが強いという話もありますが、はっきりしたことはわかっていません。できるだけ聞き取りをして、トキが昔いたところの条件を調べたいと思います。それによりはトキの復活にむけて、どのようなことをすべきなのか、してはいけないのかがわ

かると思います。

私たちの視察の結果、能登は佐渡に比べてトキの生息にとって格段に条件がよいことがわかりました。それは棚田自体の条件がよいだけでなく、佐渡では営巣用の松が枯れてしまっています、能登では元気な松がたくさん生えています。これからトキ復活の可能性をさらに高めるためには、今行われている農薬の空中散布やほ場整備のやり方も工夫が必要でしょう。トキを呼び戻すという目標と、農林業の施業法の調整が必要です。一般に、ほ場整備はそこにすむ生き物を減らしますが、周りにビオトープを同時につくったり、休耕田を上手に使ったりすれば、全体として生き物を豊かに保てるのではないかと思います。環境配慮型農業や有機農業にはいろいろなタイプがあります。どのような環境配慮型施業の組み合わせが有益か、これからさらに詳しい調査と実践が必要です。



能登半島にトキを呼び戻すために

「能登半島にトキを呼び戻す」ということは、トキという種類だけを選ぶのではなく、広い意味で奥能登の環境をよくして、農業や林業などの生業とうまく調整していくことであり、それには4つの大事なことがあります。1つ目は、地域が主体になって、自分たち

のペースでやっていくことです。トキを呼び戻すということは、どこかからトキをもらって来て、それを放つということではありません。放鳥のための準備ではなくて、環境を全体としてよくしながら、トキをいつでも受け入れられるよう準備することです。

2つ目は、ある1つの場所だけをよくするというのではなく、できる限りあちこちによい場所をつくり、それを広くつないで全体としてよい環境をつくってゆくことです。そのためには自然環境のネットワークつくりと人間のネットワークつくりの両方が必要です。3つ目は、一度にドンとやるのではなく、できるだけゆっくり自分たちのペースを守っていくことです。4つ目はやりがなら考えていくことです。仮にたくさんお金があったとしても、少しずつ工事をして、本当にそれでよいのか結果を確かめながら次に進むことが大切です（順応的方法といいます）。

このプロジェクトには、金沢大学が参加していますが、「大学でなければできないこと」を「大学らしくないやり方でやっていくこと」を心がけながら進めていきたいと思っています。